

## 障害者運動を展開したAさんの生活史

—運動への思想の萌芽(1950・60年代)—

○ 中部学院大学 氏名 打保 由佳 (05788)

キーワード3つ: ライフヒストリー法 生活史 障害者運動

## 1. 研究目的

本研究は、障害者解放運動と自立生活運動(以下、障害者運動)に携わった運動家Aさんへの聞き取り調査で作成した生活史(ライフヒストリー)を通して、Aさんが暮らす地域での障害者運動の展開とその背景にある障害者への差別の諸相を明らかにし、社会的な問題を顕在化することを目的とする。

障害者運動におけるライフヒストリーの先行研究では、複数の運動家からの聞き取り内容を分析し、個人の経験に内在化している社会的な問題を明らかにしている。

そこで、本研究では次の3点を先行研究との違いを明確にするための主な特徴とする。①Aさん個人の生涯の全体像を捉えた生活史を作成すること、②Aさんの人生に影響を与えた他者にも聞き取りを行いAさんの主体性(語る存在)と客体性(語られる存在)を表現することで運動の展開過程における他者との相互作用や関係の広がり記録すること、③運動の背景にあった差別問題をまとめ運動の意義を生活史上で明らかにすることである。

今回の発表では、Aさんの生活史のうち「出生から高校卒業(1950・60年代)まで」を取り上げる。聞き取り内容の分析によりこの年代は、Aさんが社会における差別問題への関心を強め、障害者運動を展開する上での思想が形成された時期として位置づけることができた。そのため、1970年代以降の生活史を作成するにあたり、この思想が運動を行う手法にどう反映されているのか、今後の研究へとつなげていきたい。

## 2. 研究の視点および方法

## (1) 研究の経過

2003年に本研究のフィールドを定めるため、障害者運動の関係者への聞き取り調査及び参与観察を開始し、運動家の一人であるAさんの協力を得て、2015年より、Aさんの出生から現在までの聞き取りを行うに至った。その後、聞き取り調査をふまえ、Aさんの生活史の全体構成を作成し、象徴的な出来事やAさんが運動を行う契機について更なる聞き取り調査を実施している。また、Aさん自身による運動の記録やAさんが収集した運動に関する資料を譲り受けて時系列に整理すると共に郷土史や障害者福祉施策の行政資料、障害者への差別問題の研究に関する論文等の収集を行っている。

## (2) 研究の手法

本研究は、ライフヒストリー法にもとづいて行っている。ライフヒストリー法は、参与観察や聞き取り調査により、被調査者の人生の経験を主観的な視点から生活史を作成し、被調査者の言動に影響を与えている社会規範を導き出すことで、社会的な問題を顕在化す

ることが特徴である。

### 3. 倫理的配慮

Aさんに調査の手順・手法、目的、期間、リスクを説明し、Aさん自身の意思で調査への参加を止める権利のあることを伝える。プライバシーの保護に関してはAさんの氏名や出身地、居住地を仮名にし、家族構成を変更することで本人を特定できないようにする。ICレコーダーに録音した内容は文章として起こし、生活史の作成に伴い引用した口述文はAさんに確認を求め、公表の範囲について合意を得る。

以上は、中部学院大学の研究倫理規程にもとづき研究倫理委員会の承認を受け、調査及び生活史の作成を行っている。

### 4. 研究結果

これまでの聞き取り調査をもとに、Aさんの出生から高校卒業までの人生の過程を作成することができた。

Aさんは、高度経済成長期であった1950年代に山間地にある農家の長男として生まれた。その後、Aさんが高校に入学した1960年代は、学生運動の激化や高度経済成長の裏で公害問題が発生するなど、社会により生み出された矛盾や差別に対して、社会を変革していく人びとの意識が高まった。

Aさんが通った高校には学生運動に参加した教師が在籍しており、社会に対する問題意識を持っていたことで、在日朝鮮人や部落の人びとを対象にした夜間中学に携わる活動を行っていた。教師との出会いを通して、Aさん自身も社会からの軋轢によって生み出される人権侵害や差別について考えるようになった。そして、その犠牲となっている「部落」に強い関心を持つようになった。Aさんは、教師にすすめられて読んだ一冊の本をきっかけに、部落解放同盟の事務所を訪れた。事務局の人に集落を案内され、部落の人びとの生活を目の当たりにし、自分の価値観を変えるほどの大きな衝撃を受けた。その後、Aさんは、部落解放運動に参加するようになった。

### 5. 考察

Aさんは、部落解放運動に参加することで社会がつくり出す差別の構造に目を向け、迫害のルーツに興味を持ち、運動で出会ったBさんの思想に感銘を受けた。Bさんは、部落が形成される歴史を振り返ると共に、人びとは部落をどう認識しているのか、その認識が人びとの意識にどう根付いていくのか、その意識が世代を越えてどう受け継がれていくのかを理論的に解明することに取り組んだ。

Aさんへの聞き取りをふまえ、AさんはBさんの物事の考え方や捉え方に影響を受けたこと、部落の人びとと活動を共にすることで、差別は個人的な問題ではなく社会によってもたらされている問題として捉える視点を形成したことが分かった。